

持続可能な米作りを目指す―食卓と栽培現場の命を覚える―

鳴 下 頭 彦

「誰も取り残されないこと誓う」という国連の持続可能な開発目標（SDGs）は、夕暮れにやっと仕事を果たした労働者に一日の賃金を支払った主人のたとえ（マタイ福音書二〇章）を思い起こさせる。仕事にあづけた人々を資本主義社会の競争の敗者として切り捨てるのではなく、人間としてしかるべく遇するべきではないのか。山谷の労働者のための「まりや食堂」で伝道されてきた菊地譲牧師の言葉にも重なる（注1）。

「持続可能な開発」とは、自分たちの世代だけではなく次の世代も豊かな生活を営めるように、という視座に立った考え方であり、一九八七年の国連の「環境と開発に関する世界委員会」（通称ブルントラント委員会）の報告書で打ち出された。開発に伴う環境負荷や環境問題が顕在化し、経済発展と環境保護の立場の対立していた時代状況の中で、両者を統合し、社会的な合意形成を可能にした考え方である。ブルントラントは小児科医でもあったので、このような着想に至ったのかもしれない。マラキ書にも、「父の心を子に向けさせる」、「破滅をもってこの地を撃つことがないように」とある。次の世代のことを考えることは、大地をよく管理し守ることの要件と言えるかもしれない。

農業分野でも、「持続可能な農業」が提唱されるようになったが、その内実の吟味が必要である。環境に調和し、経済的にも採算が合い、担い手もあり社会で受容され、技術的にも実現可

能な農業である。現代の農業では、例えば遺伝子組み換え作物から自然農法まで様々な技術が使われ得るが、「経済」、「環境」、「社会」、「技術」という四つの視点から、持続可能な技術と言えるのかどうか、吟味する必要がある。

米の生産技術の専門家として原稿の依頼を受けたが、「持続可能な米作り」の特徴を四つにまとめてみた。

一つ目は、将来的人口増加に備えての食料生産の強化である。二〇五〇年には現在七四億人の世界人口は九八億人まで増加すると推定されているが、仮に米の需要が一億トン増加するならば、現在の米の世界平均収量ヘクター当たり四・五トンをさらに一トン近く増やさねばならない。少子化による人口減少が予測されている日本だけを見てみると分らないが、アフリカやアジアの人口増加率は高い。食生活の変化により、動物性たんぱく質の摂取が増加すれば、食料問題はさらに逼迫する。

二つ目は、経済活性化・発展への貢献である。どうやって雇用を作り、売れる米を作るのが重要な課題となる。良質で環境に優しい米をたくさん開発できれば、農家とマーケットと食卓は豊かになる。日本でも高い米の生産費（玄米一〇キロ当たり二五〇〇円以上）を、経営の効率化により一五〇〇円までに大幅に削減する研究が、先進的農家と研究者の新しい協働により進められている。

三つ目は、環境への負荷を減らし、起こり得る環境変動・変化に適応した技術の構築である。気候変動に関する政府間パネル（IPCC）によると、産業活動の拡大による二酸化炭素排出の増加により、温室ガス効果による地球の平均気温が上昇し

ている。降水量の増加や、集中豪雨・干ばつの発生に関しても、長期的な変化と短期的な変動の増大とが予測されており、生態系は甚大な影響を受け、農業生産の維持・向上が難しくなるかもしれない。ガンジス川、エーヤワディー川、チャオプラヤ川、メコン川など、アジアの大河川のデルタは米の大産地であるが、海水面の上昇や、河川流量の減少により、デルタに塩水が遡上し、稲作が困難になっている地域が見られる。環境の劣化を食い止め、起こり得る環境変化に適応できることを目指して、一例ではあるが、環境ストレス抵抗性の高い米の開発が進められている。

四つ目は、栽培現場への関心の増加である。食卓に載る米や食物がどのようにして育てられているのか、栽培と生産の過程を理解したいという関心である。日本では、有機栽培米とか特別栽培米など、すぐれた栽培方法を認証する制度により、栽培過程の透視化とその正当な評価が図られている。世界の農産物では、国連食糧農業機関や各国が定める農業生産工程管理（GAP（ギャップ））による認証制度が整備されてきている。米の場合は、国連、研究者、企業、農家、市民らから成るプラットフォームによる認証システムの形成が二〇一一年から始まり、持続可能な米作りの開発途上国での普及が目指されている。また、学校や地域社会での食農教育もより身近な例といえる。現代社会では、食卓と栽培の距離は遠くなり、食品偽装のような犯罪まで起こる。食物が作られる栽培現場は、草や虫や泥と汗で汚れる現場として敬遠されてきた一面もある。そんな栽培現場を大切にしていこうとする社会意識が高まっている。

栽培現場へ赴くことは、食物を命として受け止め、命を育む可能性のある大地に立つことである。栽培の現場は、国内だけでなく、海外にもある。海外の食物生産の現場へ善意の関心を持ち続けることは、海外への食料依存度の高い日本人の国際マナーとしても推奨される。購買力を持つ人々が、貧しい人々もそこにいることと、後の世代の人々のことを慮りながら、環境と経済の両面でよりよい栽培方法を理解し、それに投資するならば、日本と世界の農業を、よりよい方向に変えることができる。

「誰も取り残されないこと」は、非常に大きな課題である。世界には依然として飢餓人口が八億人以上いる。最初に山谷での食卓の働きを紹介したが、食物を行き届けようとする内外の実践が社会に伝えられ、そのための技術やシステムをデザインしていく必要がある。

食物は、人間が外にある命によって生かされている証であり、宗教や民族の違いによらない。悪い日でもよい日でも、自分を養う恵みの糧が備えられていることを、食卓を通して、からだ的に知る。キリスト者であるならば、日々の糧を祈り、感謝と喜びをもって受け取らなくてはならない。食卓が、真の命の交換の場となり得ることを、指し示し続ける責務と特権がキリスト者にある。

注1 『この器では受けきれなくて―山谷兄弟の家伝道所物語』（新教出版）

（東京大学アジア生物資源環境研究センター教員
久留米キリスト教会）